

タイヤル族の戦後苦難の歴史とその肉声

菊池一隆著

台湾原住民オーラルヒストリー

北部タイヤル族和夫さんと

日本人妻緑さん



四六判 288頁
集広舎
[本体 2,500円 + 税]

水町 誠司

を中心に聞き取り調査を行っている。

本書にて著者が重点的に扱っているのは、北部タイヤル族である和夫さん（一九三八年生まれ。中国名は陳振和であるが、自他ともに日本名である「和夫」の名を使用）とその妻である緑さん（一九四三年生まれ。日本人）および、「白色テロ」の関係者への、長期間にわたる聞き取り調査である。緑さんは当然のことながら、和夫さんも台湾語や北京語より日本語の方が流暢であるため、ほぼすべて日本語で聞き取り調査を行っている。念のために補足しておく、現在高齢のタイヤル族は、日本語が流暢である。それは台湾人の中でも日本統治時代に特に日本へ適応しようとした結果、元々母語であったタイヤル語が上手く話せないほどに融和したからである。なお、タイヤル族は固有の文字を持っていない。文字を持たない民族

本書は、台湾原住民であるタイヤル族を中心に、約一〇年間にもわたり聞き取り調査を行ったオーラルヒストリー（口述歴史）の本である。このことは、本書の姉妹本である『台湾北部タイヤル族から見た近現代史』が大量の史料を元にして記述されていることから、対比として特色が一層際立つものとなっている。著者の専門分野は日中戦争史であるが、並行して華僑研究なども行っており、今回は台湾原住民であり少数民族であるタイヤル族に研究スポットを当てている。本書の全体の構成は、第一部と第二部に分かれている。第一部ではサブタイトルにもあるように、和夫さんと緑さんへの聞き取り調査の成果が収録されている。第二部では、角板山に住む北部タイヤル族である林昭明氏（ワタン・タンガ）、黄新輝氏、林昭光氏、林茂成氏および黄榮泉氏から、「白色テロ」

や、識字率が高くない民族の場合は、文献資料の比重が文字を持つ側に偏る。タイヤル族の場合は、日本側や国民党側の視点でほとんどの文献が書かれているため、タイヤル族の視点からものを見る場合はオーラルヒストリーの重要性が特に大きくなる。

第一部は和夫さんと緑さんの生い立ちおよび苦勞が窺える内容となっている。一九六〇年代の米ソ冷戦やベトナム戦争という世界的混乱の中で、緑さんはペンフレンドとして文通していた和夫さんと結婚するため、日本から台湾へと移住した。そして、移住後の台湾の生活状況や政治状況が語られている。このふたりは角板山という山岳地域に生活するのだが、元々タイヤル族が住んでいた場所であったため、平地とは暮らしぶりや文化が異なっていた。角板山は台湾の中でも特異な地域であり、外国人は入山証が必要で、平地の住民よりも複雑な政治環境で暮らしていたように見える。六〇年代における国際結婚の大変さ、さらには台湾の少数民族と結婚することの希少さも相まって日台双方から物珍しく見られていた。例として、山と平地を行き来するだけで呼び止められ、「外国人が角板山に入るには入山証が必要だが持っているのか」と職務質問されるなどの扱いを受けている。

第二部では、角板山に住む北部タイヤル族に対して、主に

一九五〇年代に行われ、きわめて重要な問題である「白色テロ」を中心に聞き取り調査を行っている。そして、戒厳令下のタイヤル族が置かれた政治的な立場や、「白色テロ」がどのようなもので台湾にいかなる影響を与えたのかが明らかにされている。また、タイヤル族の起源や伝統文化、清朝時代の統治状況、日本統治下の霧社事件、国民党政権下での二二八事件についても語られている。中でも黄新輝氏が語った、戦時中に日本軍として行動した高砂義勇隊の活動は、ニューギニア戦線における日本軍の状態——例として、食料確保のための動物狩りや人食行為、敗戦時の日本人の自決など——が非常にリアルに伝わってくる。また、父親であるロシン・ワタンが冤罪で処刑された後における林茂成氏の精神的な苦痛、氏を取り巻く環境の急激な悪化は胸に詰まるものがある。各人インタビュの簡単な内容は以下の通り。林昭明氏は、自身が共産党員の疑いを掛けられ政治犯として逮捕された話や、その後の獄中生活の話を語る。タイヤル族の起源から組織機構、清朝時代や日本統治時代、現在に至るまでのタイヤル族の状況も語っている。黄新輝氏は、自身が第五回高砂義勇隊隊員としてニューギニア戦線に行った際の状況を語る。部隊内の高砂族と日本人との関係、武器の種類や人食を含めた食糧事情、病気の種類、戦争末期や日本敗戦後の戦闘状況

などを語っている。林昭光氏は、二二八事件の際にタイヤル族に対し、勝ち目がないからこれに参加しないよう呼びかける行動を取ったことを語る。他、霧社事件に関して伝え聞いたこととして、角板山タイヤル族は参加しないよう呼びかけられていたことや、ロシン・ワタンについて知っていること、および自身も政治犯として逮捕されたことを語っている。林茂成氏は、タイヤル族の刺青や男女別の仕事などの伝統文化、日本統治下におけるタイヤル族の抵抗、戦争末期での台湾の状況、父親であるロシン・ワタンの逮捕、その後自身が受けた不当な扱いを語っている。黄榮泉氏は、自身がキリスト教徒となった経緯、タイヤル族とキリスト教との関係、布教活動について語っている。

すなわち、本著は日本統治下から国民党政権の戒厳令下にかけての台湾の状況を、北部タイヤル族の視点を中心として聞き取り調査したものである。その点だけでも、きわめて重要な著作といえよう。当時の状況は、台湾政府が情報公開している部分もあり近年研究が進んでいるが、そのほとんどは本省人か外省人の視点で研究され語られるものであった。当然、台湾原住民、すなわち少数民族の視点から研究され語られているものは非常に少数派であり、北部タイヤル族の視点から聞き取り調査を行った本著は、切り口からして必然的に

オリジナリティ溢れる生き生きとした著作となっている。また、これが単にタイヤル族の文化や伝統について扱っただけならば、よくある民族の紹介本としか印象に残らず、特段オリジナリティのあるものとはならない。その点、本著は歴史部分に関して詳細に聞き取り調査を行っており、民族や文化より歴史部分に重点を置き、かつ戦後の台湾も重点的に扱っている部分にオリジナリティを強く感じさせる。

次に、本著の評価点を述べる。台湾の少数民族であるタイヤル族の視点から日本統治下の台湾や国民党政権下で戒厳令が敷かれていた台湾の状況が詳細に取り扱われている点である。本著は聞き取り調査を主体として記述されており、実際のところを知る人の話は非常に現実感があり興味深い。とはいえ、当人の記憶を頼りに語っているためかところどころ不鮮明であいまいな発言もある。これは、聞き取り調査であるため仕方のないことであるが、本著では理解を助けるため補足が付け加えられている点が良い。また、前著の不明瞭であった国民党政権下におけるタイヤル族の生活の実態や、言論に関してどのようなことに気を付けていたか、といった部分が本著で具体的にわかる作りとなっており、前著と合わせて読むことにより上記の疑問点および問題点は大部分が解消される。この部分こそ本著の評価点のひとつであり、前著と本著で相

互補完されている。

本著を通じて知ったことは多岐にわたるが、心に残ったことをいくつか挙げる。第一にタイヤル族は歴史の波に大きく翻弄されており、その時々々の権力構造に合わせて必死に生き延びてきたことである。第二に、一九六〇年代の台湾において言論、特に政治に関する内容には非常に気を付けなければならず、下手をすると、人生を棒に振る可能性が十二分にあったことである。第三に、台湾において今現在とは異なり漢族が多く住む平地と、タイヤル族が多く住む山では生活や文化だけでなく、北京語が通じないことや、平地民より日本に順応していたことから、当局の扱いがより厳しくなっていたことである。特に、一九五〇年代に始まった「白色テロ」にて疑心暗鬼に陥った蒋介石は、タイヤル族をはじめとした少数民族が反乱を起こすのではないかと恐れていた。

本著は内容にはほぼ満足いく出来なのであるが、一点だけどうしても引つ掛かる部分がある。それは、個人的感想となるが、本著のタイトルは今ひとつインパクトが欠けていると感じたところである。確かにタイトルから内容は想像しやすいが、これでは元々台湾の少数民族に興味のある人しか、本著を読む気にはならないのではないか。もちろん、内容は素晴らしいものであり、変に扇情的なタイトルを付ける必要は

ない。私個人も、そういったものは好きではない。とはいえ、偶然本著が目に入った人の興味を惹きつけにくいタイトルなのは残念である。今回のタイトルは、学術書の類であれば特に構わないだろう。だが、本著は研究者以外の一般読者層もターゲットにした書籍である。内容が非常に充実しているため、タイトルで損をしていることは残念である。他には、些末なことではあるが、例えば緑さんは台湾に移住してから北京語や台湾語がどのくらいの期間で話せるようになったのか、片言の北京語は話せるようになったというが片言でもなるとかなるくらいには日本語が通じていたのか、黄新輝氏は人肉が「酸っぱかった」と語っているがそれは単に腐りかけの人肉ではないのだろうか、など気になる点がいくつか存在する。しかし、こういったら怒られるかもしれないが、中にはわからないことをあえてわからないままにする、あるいはわからない部分をあれこれ想像して楽しむ、そういった部分もあっていいのではないか。こういった細かい疑問点は、自身としてはそのようにして楽しんでいく。

最後に繰り返し述べるが、本著と前著をあわせて読むことによって、タイヤル族や台湾の歴史についてより一層理解が深まる。是非とも両方の書を読んでもらいたい。

(みずまち・せいじ 愛知学院大学大学院博士後期課程)